

保育者養成における学生の表現作品の創作および 発表活動の意義について

藤元 恭子
(幼児教育)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

The Meaning of the Expression Work Creative Activity and the Presentation of the Student in the Early Childhood Teacher Training

Kyoko Fujimoto

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1, Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要 旨 本研究では、保育者養成における表現作品の創作とその発表という活動の意義について検討を行う。具体的には授業での任意のグループによる表現作品の創作と発表という活動を通して、受講者である学生がその過程においてどのような学びがあり、その結果、どのような価値を見いだしているかを探ることである。結論として、より「保育の現場」というものを意識した活動として捉えている傾向が示された。

キーワード 保育者養成 グループ 表現 作品創作 発表

1. はじめに

他人の目を気にして、自由に動けなかった学生がいつの間にか自分の表現の世界に没入し、観ている者を感動させる表現をしている。グループによる表現においても他人任せでアイデアの一つも出せなかった学生が、真剣に表現に向き合い、意見を出しまとめている。このような現象に遭遇したとき、その学生の成長を見たと同時に、それまでのどのような経験や表現に対する意識変革がこのような現象を引き起こしたのか不思議に感じていた。

筆者は、幼稚園教員、保育士を目指す学生に身体表現の授業を行って15年になる。その中で一貫として主張してきたことは、子どもの表現

を見取るためには、保育者自身が豊かな表現活動体験を通して、その中から学んだこと、感じたことを大事にするということである。その一環として、受講学生が任意のグループを編成し、自分以外の人の物の感じ方や捉え方、表し方の違いを知り、それを擦り合わせながら創作を行うこと、また、それを発表して他の人に観てもらうこと、さらに自らの表現を振り返る活動を行っている。このことにより、筆者としては、受講学生が各人の表現技術を高めるよい契機となり、表現の引き出しの数を増やし、実習ひいては現場に出て「使える」経験となることをねらっているのである。

筆者はこの作品創作において、ダンス的要素が強い身体表現にとらわれず、歌や楽器演奏な

どの音楽的要素、背景や小道具作成などの美術的要素も含んだ総合的な表現となるように指導を行っている。また、グルーピングにおいても、その時の受講学生の学年や所属を考え、特定の所属や学年がまとまらないように人数調整を行い、具体的に誰がどのグループになるかは学生の任意としている。筆者からは前年度の発表作品を参考に提示し、テーマが重複しないよう調整をされること以外、テーマ設定から背景、小道具、台本など、すべてグループに任されている。

さて、保育者養成校では、少なからずこのような授業が設定され、その成果が「文化祭」や「ほいくまつり」などで発表されている。このことはこのような体験が学生の教育、ひいては現場の保育において必要とされていることの表れであるといえよう。また、宮本（2007）はオペレッタの授業が学生にとって総合的な表現力のスキル向上に効果があったことを報告している。さらに協調性や団結力を養う格好の機会であったことも述べられている。

しかし、確かにそのような効果があったとしても、その効果をどこに見いだそうとして活動していたのかは明らかになっていない。つまり、筆者がねらっているような、現場で「使える」体験として捉えられているのかはわかっていない。

そこで、本研究では、筆者の授業を受講した学生が、授業において表現作品を創作し発表する活動を通してどのような学びがあり、また、どこに価値を見いだしているのか意識調査を行う。さらに授業のねらいとの相違を検討することを通して、今後の授業に役立てたいと考える。

2. 研究の方法

対象者：平成19年度後期集中授業「児童文化」

受講生21名（5グループ）^{注1}

平成20年度後期「身体表現教育法」

受講生26名（5グループ） 計47名

各授業後に自分たちの作品を鑑賞し、その

後、筆者が作成した質問紙に回答してもらった。回収率は100%であった。

質問内容：受講者自身が、表現や創作、発表というものに対してどのような意識を持っているのか、その実態について、身体表現が得意（好き）である、音楽表現が得意（好き）である、図工表現が得意（好き）である、何かを創作することが得意（好き）である、人（子ども）が楽しむことを好んでする方である、作品の内容を決めるときに積極的にアイデアを出した、の6つの項目について、5当てはまる、4やや当てはまる、3ふつう、2あまり当てはまらない、1当てはまらないの5段階によって回答を得た。

さらに、振り返りとして、制作時、発表練習時、発表時のそれぞれにおいて参考になったことや気を使った点、ビデオ視聴後の自分の表現について、作品創作から発表までの過程において大切なこと、作品創作と発表は保育者にとって大切か、について、自由記述による回答を得た。

自由記述については、筆者が質問項目ごとに、記述の主旨に留意しながら表記の一部を整え、意味のあるまとまりとしてカテゴリー分けを行い、集計を行った。

3. 結果と考察

3-1. 受講生の実態

実技科目の特性として、その行為が好きかどうかの取り組みに影響を与えることがある。

本研究における対象者の実態（図1）としては、身体表現が得意（好き）であるについて当てはまると回答した者が47名中15名（31.9%）、やや当てはまるが47名中18名（38.3%）であった。また音楽表現が得意（好き）であるについては、当てはまるが13名（27.7%）、やや当てはまるが20名（42.6%）、以下同様に図工表現については17名（36.2%）、12名（25.5%）であり、図工表現について少し落ちるものの、受講生の約7割が表現については得意、好きであるという結果であった。

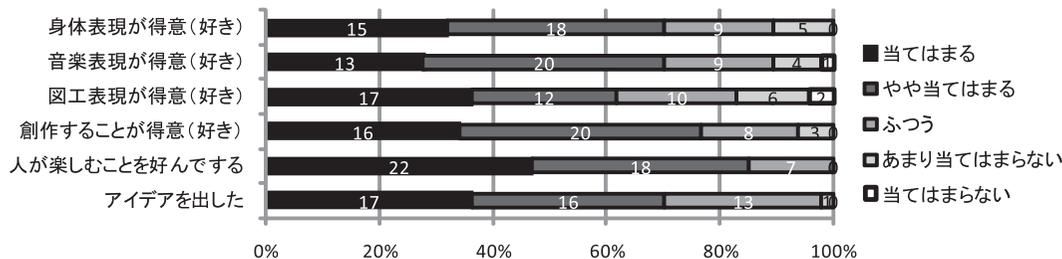


図1 受講学生の表現・創作に関する実態(人)

さらに、筆者のこれまでの経験から実技としてする方はよいが、創作することは好きではないとする学生が多かったこともあるので、創作することについてはどうなのか回答してもらった結果、当てはまるが16名(34.0%)、やや当てはまるが20名(42.6%)であり、約8割が得意あるいは好きであるという結果であった。実施することだけでなく、創作についてもあまり苦手意識をもっていないことが示された。

さらに、人や子どもが楽しむことを好んでする方であるという項目については、当てはまる22名(46.9%)、やや当てはまる18名(38.3%)であり、受講生の9割近くの回答を得た。この項目についてはあまり当てはまらない、当てはまらなと回答したものが0名であり、子どもを楽しませたい気持ちが強いことが、本受講学生の特徴であることがいえる。

さらに、アイデアを積極的に出せたかについても、当てはまる17名(36.2%)、やや当てはまる16名(34.0%)であり、約7割がアイデアを出せていたと回答していた。

受講学生の実態としては、実施についても、創作することについても積極的に取り組み、かつ子どもを楽しませたい気持ちが強いことが示された。

3-2. 創作活動時について

(1) 創作内容について

時間的な制約を考慮してか、絵本を題材にしているグループが多かった(10グループ中8グループ)。ただ、内容をそのまま取り入れるのではなく、グループの人数や役柄などを考慮しながら改作していた。また、絵本の選択について

は、テーマややりたいことを先に決めて絵本を探したもの、グループで持ち寄ってその中から決めたものの2つのパターンがあった。

残りの2つのグループは、オリジナルストーリーであった。1つはベースが様々な童話にあり、それをつなげてストーリーを創ったもの、もう1つはオリジナルストーリーを創る前提で、グループ内でアイデアを持ち寄り、お話にしたものであった。

グループによって内容の決定はそれぞれであるが、選択の過程においては、子どもにわかりやすい内容であること、メッセージ性のあるもの、登場人物の魅力にひかれて選んでいることが記述されていた。

(2) 制作について

制作しているときに参考となったものについては、題材や考えるベースとなった絵本が多くあげられていた(31名)。また、児童文化の受講生は内容に紙芝居も加えていたため、紙芝居も含まれていた。オリジナルストーリーのグループはグループ構成員のアイデアをあげていた。身体表現教育法の受講学生は絵本もあるが、グループの中でのアイデアやアドバイスが参考になったとあげていた。また昨年度の発表作品のVTRもあげていた。

制作中に気を使ったこと、気になったこと、気づいたことなどを記述してもらった結果、グループ活動としての意識と、観客(子ども)に対しての意識、作品自体に対しての意識に分類できた。

まず、グループ活動としては、グループ内での雰囲気作り、アイデアをどう反映してい

くか、みんなの意見を取り入れること、役割分担の難しさなど、まずグループ内での意思疎通をはかるために気を使ったことがあげられていた。また、他のグループを意識して、他のグループがしていないことをする、自分たちなりのアレンジをすることがあげられていた。

観客（子ども）に対しては、観客（子ども）が楽しくみられるように、テーマが理解しやすい（メッセージがより伝わるための）工夫をする、見やすい小道具を創ること、台詞まわしを簡単に、正しい言葉使いで、わかりやすい身振りや手振りをつけて、などがあげられていた。

作品自体のことについては、テーマにそうように、盛り上がりをごどこにおくか、絵本の世界観をできるだけ忠実に再現したい、絵本にあった場面展開の工夫があげられていた。

3-3. 練習・発表活動時について

(1) 発表練習について

具体的に台本や作品の流れが出来上がったところで、実際に動きながらの練習に移っていく。その過程で参考になったことをあげてもらったところ、一番多かったものが、客観的な視点であった（16名）。これは、同じグループ内で演技の確認をしたり、アドバイスをもらったりしたことで参考となったようである。また、身体表現教育法の受講学生は、中間発表時に演技をビデオ録画し、自分の演技を客観的に見られたことも参考になったものと考えられる。次にあげられていたのは、他のグループの作品であった（10名）。それぞれ、同じ場所で練習することもあり、演技、小道具について、良い意味で刺激をうけ、参考になったようであった。さらに、昨年度作品のVTR（5名）、教員のアドバイス（4名）、ダンス室の鏡越しに見る自分たちの演技（4名）をあげていた。

発表練習中に気を使ったこと、気になったこと、気づいたことについて記述してもらった結果、児童文化受講学生と身体表現教育法受講学生で違いが見られた。

身体表現教育法の受講学生は、声の大きさ、間の取り方、台詞があるときとないときの演技

など、舞台上での動きや動作が多くあげられていた（19名）のに対して、児童文化受講学生は、その記述（5名）以上に、見ている人がおもしろいと感じるか、子どもが楽しめるように（7名）と記述している者が多かった。また、作品のテーマがたつたように、自己満足の作品にならないように、など、多岐にわたっていた。身体表現教育法の受講学生にも、このように観客の立場で考えることをあげている者もいたが、わずか3名であった。この違いを考えてみると1つには、制作内容の違い（児童文化では紙芝居も含めた児童文化財を中心とした制作と発表、身体表現教育法では総合表現としてのオペレッタ）もあると思われる。もう1つは、受講生の構成である。児童文化の受講生は当時、幼児教育コースの卒業を控えた4年生と、4年生進級間近の3年生、身体表現教育法の方は幼児教育コース2年生と他領域コースの3年生であった。

このことから、観客（子ども）目線で考えるという保育現場指向の強さが表れたものといえるだろう。

(2) 作品発表時について

それぞれのグループによる練習を経て、本発表を行った。発表順はあらかじめグループ構成員の総意をもとに、代表者によって決められた。また、ビデオ録画をし、自分たちの作品の振り返りを行うこと、次年度受講学生の参考にすることをあらかじめ伝えてあった。

その発表時に、注意していたことや気になったことをあげてもらった結果、以下の4つに分類された。

- 自身の演技（声の出し方、台詞を忘れないように、役になりきって等）
- 観客の反応（楽しんでくれているか）
- 作品について（音の使い方やタイミング、役割ができているか等）
- 発表について（雰囲気づくり、楽しんでもること等）

もっとも多かったものは、自身の演技についてであり、児童文化受講学生で10名、身体表現

教育法受講学生では18名が記述していた。次に多かったものでは、児童文化受講学生が、観客の反応（7名）、身体表現教育受講学生で発表についてであった（5名）。

このように発表時には自身の演技を特に気をつけながら、観客の反応や楽しんで演技することを心がけていたことがわかった。

3-4. 発表後の振り返りについて

(1) 発表のビデオ視聴後の自分の表現について

ビデオ録画したものを視聴し、自分の表現についてどう感じたのか記述してもらった。その結果、大半の学生が自身の動きや表現に対する反省点、改善点について記述していた（児童文化12名、身体表現教育法22名）。自身が思った以上に、声が出せていなかったり、はっきり表現できていなかったという記述が多かった。発表時には自身の演技に一番気を使っていたはずである。しかし、客観的に見ると、声量も表現も自分が思うより（注意していたものより）もっとしなげなければならないということに気づかされたのである。これは、授業の中でも折にふれて、自分が思うより大きさに演技する、動きを大きくすることが見ている人により伝わるということを説明しているが、実際に自身の演技を客観視することでより実感できるものであることが理解された。このことを今後の課題として記述しているものも多々いた。

(2) 作品創作から発表という過程において大切なこと

先述したように筆者は、個人的に表現のスキルを高めるためにも、グループにおいてそれぞれの考え方や表現の違いを認めながら創作すること、そして発表することが大事であると考えている。

実際に学生が、作品を創作し発表するという活動において何が大切であるかを問うたところ、以下の3つに集約された。

- 協調性(良好な人間関係, チームワーク, グループ内の連携, イメージの共有)(児

童文化6名, 身体表現教育法18名)

- 見る人(観客, 子ども)のことを考えて創作, 発表をすること(児童文化9名, 身体表現教育法10名)

- 自分が楽しむこと(児童文化10名, 身体表現教育法5名)

協調性に関する記述が多かったことは、グループにおいて、自分の意見を言ったり、他人の意見に耳を貸したりすることから、一つの作品を作り上げていくことの難しさを感じていたこと、その中で自分を表現していくこと、他人の表現を認めていくことを学んでいっていることが伺える。よい作品にするためには協力して作り上げていくことが大切であるということ、その上で発表を終えた後の達成感をグループで感じることの素晴らしさを体感したのではないだろうか。このことは宮本(2007)の見解と一致するところである。

さらに、本受講学生は、見る人のことを考えることで自己満足に終わらない作品と演技を心掛けること、また、自分が楽しんで行うことで子どもに伝わることがあるところにも大切さを感じていた。

(3) 保育者にとってこのような活動は大切な学生時代のこの経験が保育者となろうとしているとき、どのようなところで活かされると感じるか記述してもらった結果、以下のように分類された。

- (作品を創作する, 子どもの前で表現することが)保育において必要不可欠だから, 現場で活かすことができる

(児童文化4名, 身体表現教育法10名)

- 保育者が表現の楽しさや難しさを知っていることで, 子どもにも伝えられるものがあり, 指導に活かすことができる。

(児童文化3名, 身体表現教育法9名)

- 保育もチームワークが大事, このような協調性やチームワークを身につけられる体験やいいものを創ろうという姿勢は保育全体にもつながっていく。

(児童文化5名, 身体表現教育法2名)

- 他の作品を見ることで、アイデアが得られ、自分の表現の引き出しが増える。

(児童文化5名, 身体表現教育法2名)

- 子どもを引きつけられる力, 子どもと共感する力, 発想力, 表現力をつけることができる。

(児童文化4名, 身体表現教育法3名)

まず, このような活動が保育者となったとき, 必要でないという意見は皆無であった。また, 個人の表現技術を高めるといような具体的な記述は見られなかったが, 「現場で活かせる」や「保育において必要不可欠」との認識があるということ, また具体的に自分の表現の引き出しが増えるとの記述があったことにより, 筆者がこの活動において目的としていた部分についてはある程度達成しているとみてよいのではないかと考えられる。

グループ学習が協調性を養う面において, 効果が発揮されることは周知のことであるが, 本研究における受講学生からは, 「保育における協調性」があげられていた。つまり, 表現というジャンルがコミュニケーションに深くかかわっていること, 作品創作と発表という経験が保育者として子どもの前に立つ上で大切であり, 保育全体にもつながりをもちうる可能性をもっているということがいえるのではないかと考えられる。

4. まとめ

本研究では, 表現にかかわる作品創作と発表という活動において, どのようなことに価値を見いだしているのか調査をし, 考察することである。

まず, 受講学生の実態として, 基本的に表現すること, 創作することが得意あるいは好きであり, 人や子どもを楽しませたい気持ちが強くあるということがわかった。

その上で, グループにおける創作では, 子どもにわかりやすい, メッセージ性のあるものを内容(特に絵本)として, まず, グループ構成員とのコミュニケーションをはかり, 子どもに

わかるような工夫に注意しながら制作していることがわかった。

発表練習では, 他のグループの作品や進度に刺激を受けながら, 客観的な視点でのアドバイス(中間発表での自分の演技, 同じグループ構成員での見せ合いによる)を参考に, 特に舞台上での動きや動作に気を使っていた。

また, 自身の動きだけでなく, 見る側の視点にたって練習を行っていた記述もあり, 保育現場指向の強さが表れたものと推察された。

発表では, 自身の演技について特に気をつけながら, 観客の反応, 楽しんで演技することを心がけていた。しかし, その後の振り返りでは, 自分が思っているほど, 表現出来ていなかったことがわかり, 客観視することで今後の自分の表現についての課題を実感することができていた。

グループでの作品創作・発表の体験は, 保育に不可欠であり, 現場で活かせるものであり, それが特に, 保育における協調性へつながるものであるという認識をもっていると考えられた。

このように, 本授業受講学生にとって, 表現作品の創作・発表という活動は, 筆者が授業でねらったことはもちろんのこと, それ以上に, 保育現場での必要性を感じとりながら取り組んでいることがわかった。この点においては, 筆者がその環境を保障し続けていくことが責務であると思われる。

しかし, 授業ではそれだけの内容にとどまらず, 模擬保育や表現技術の習得ということも行っており, この体験だけの考察のみでは具体的な表現指導についての検討は難しそうである。今後は模擬保育やその他の活動との関連もみて総合的に考えることが課題とされる。

注1

平成19年度の後期集中で行われた「児童文化」という授業では, 構成として①子どもの遊びの世界と安全配慮に関する講義とワークショップおよびプレーパーク(冒険遊び場)での実習 ②紙芝居,

絵本，ペープサート，身体表現などの制作・創作
実習および発表の2つに分けられており，それぞ
れに担当教員が分担して行った。本研究はそのう
ちの②において筆者が主に担当した部分におい
ての検討である。

文献

宮本智子（2007）「保育者養成校におけるオペレッタ
授業の効果－表現力の観点から－」国際学院埼
玉短期大学研究紀要，第28号，pp.19-27